



で き こ と

平成 25 年 6 月 13 日 (木)、当館で平成 25 年度公立図書館等職員専門研修「児童・青少年サービス研修」が開催されました。

午前中は「百町森のお話の場合～年齢別の児童サービス～」と題して、子どもの本とおもちゃ百町森代表である柿田友広氏に読み聞かせの心得や本・絵本の選び方について、お話しいただきました。

午後は「子どもの認知発達と読書」というテーマで、静岡文化芸術大学准教授の小杉大輔氏にご講演いただきました。発達段階に応じた読み聞かせの効果や、認知心理学の観点からみた絵本の有効性など、かみくだいてご説明くださいました。

(2 ページ目にて、概要を紹介します。)

平成 25 年 7 月 19 日 (金) には、当館講堂で、「子ども図書研究室講演会」が開催されました。『かわいいだけが子どもの本?—いま、子どもの文学を考える—』をテーマに、「ゲド戦記」シリーズの翻訳家として知られる青山学院女子短期大学名誉教授の清水眞砂子氏を講師にお迎えしました。

(3 ページ目にて、概要を紹介します。)

◇イベント情報◇

◆静岡市美術館「はじめての美術 絵本原画の世界 2013」

期間：9 月 14 日 (土) ～10 月 27 日 (日)

時間：10：00～19：00 (入場は 18：30)

休館：月曜 (祝日の場合は開館、翌日休館)

料金：一般 800 円、大高生・70 歳以上 600 円、中学生以下無料

◇子ども図書研究室のテーマ展示◇

◆「はじめての美術 絵本原画の世界」展
静岡市美術館での展覧会に合わせて、子ども図書研究室所蔵の絵本を展示します。

◆「ももたろう」読み比べ
このほど寄贈された資料を中心に、「ももたろう」の本を集めてみました。

◇イベント情報◇

◆平成 25 年度第 21 回静岡県図書館大会

会 場：静岡県コンベンションアーツセンター
グランシップ

日 時：平成 25 年 10 月 28 日 (月)
9:45～15:45

申込み：申込用紙 (県立中央図書館ホームページからプリントアウト・県内公共図書館で配布) に記入の上、来館、郵送または FAX

宛 先：静岡県立中央図書館 企画振興課振興係
〒422-8002 静岡市駿河区谷田 53-1

FAX：054-264-4268

締 切：平成 25 年 10 月 3 日 (木)

※第 3 分科会は 10 月 17 日 (木) まで

◆子どもの本に関する分科会

：13:45～15:45

◇第 2 分科会 (定員 180 名)

《乳幼児に対するサービス》

テーマ：「赤ちゃん絵本とわらべ歌
～読んでみよう、絵本
歌ってみよう、わらべ歌～」

発表者：荒川 薫氏 (童話作家)

◇第 3 分科会 (定員 450 名)

《子どもと読書》

テーマ：「わたしの木、こころの木
～いせひでこの世界～」

講 師：いせ ひでこ氏 (絵本作家)

◇第 5 分科会 (定員 70 名)

《読書活動》

テーマ：「本、なぜ読むの？」

～21 世紀、本と子ども・本とおとな～

講 師：鈴木善彦氏 (静岡文化芸術大学理事)

◇第 6 分科会 (定員 70 名)

《学校図書館》

テーマ：「授業に“効く”学校図書館活用
～今、学校図書館に求められること～

講 師：對崎奈美子氏 (東京学芸大学特命教授)

公立図書館等職員専門研修会 児童・青少年サービス研修 報告

前半の講師の柿田氏は、絵本専門店を開くことになった経緯などをお話しになった後、実際に読み聞かせをしながら、お話会の進め方、読み聞かせの心得などについて、お話しくださいました。後半の小杉大輔氏は、読み聞かせが乳幼児に与える影響を認知心理学の立場からお話しくださいました。

柿田氏のお話会は、次のように進みます。まず、鈴を鳴らし、お話会の開会を知らせます。そして、ろうそくに火をつけます。読み聞かせの前に、わらべうたやヨガを行いません。これは、深呼吸をするためです。呼吸を整え、気持ちを落ち着かせてから、読み聞かせをします。途中で場を乱す子どもがいても気にしません。お話会が終わったら、最後にろうそくを消しておしまい。決して「どんなおはなしだった？」とは聞きません。これが柿田氏流のお話会です。

読み聞かせの心構えも教えて下さいました。「前もって2、3回は読んでおく」「ウケを狙わずに普通に読む」「声色を使うなど、演出をしない」「イベントとしてではなく、日常としての読み聞かせを意識する」「大型本は使わない」「本のタイトルのみではなく作者、出版者も読む」「本を見て、子どもたちを見ない」「途中の質問にはさらりと答え、物語の流れを止めない」「ざわざわしてきても、よく聴いている子どもたちのために読む」「感想や拍手を求めない」「同じ本を何度も読むのもよい」「絵本ではなく、お話にも挑戦する」といい

読み聞かせに用いる本についても、ロングセラー中心に絵が物語る本、文章がきれいな本、大人も感動する本が読み聞かせに向く本であり、本の選択は子どもではなく、大人がすることが大切であると、選び方を教えてください

ました。また、柿田氏は『しろくまちゃんのほっとけーき』『だれかしら』『ティッチ』『はじめてのおつかい』『せんたくかあちゃん』『てぶくろ』などの読み聞かせもしていただきました。声の調子や読むスピードなど、参考になるところがたくさんありました。

小杉氏は、様々な実験結果を示しながら、「3、4か月の乳児に絵本を見せ、子どもに語りかけることで、乳児は多くの言葉を知り、さらに読み手との間に精神的な絆も作ることができる」、そして、「9ヶ月の乳児に読み聞かせをすると、母親が赤ちゃんをほめ、赤ちゃんもほほえむ回数が増える。その結果、赤ちゃんの有能感や自信が育まれ、コミュニケーションが促進される」、また「乳児は繰り返しが好きで、繰り返し覚えることで、親にほめられ、子どもはますますその本やお話が好きになる」など、認知心理学の立場からも、赤ちゃんへの読み聞かせが、子どもの発達に良い影響を与えていることが分かっておっしゃっていました。

お二人の講演を通じて、お話会の方法、読み聞かせの効果を学ぶことができました。お話会について振り返る良い機会となりました。

所蔵資料から

研究



『絵本の森へ』
松居 直／著
日本エディタースクール出版部
1995年5月

古典を含む24冊の絵本を取り上げて、絵本のおもしろさや、作品の表現を解説した本。柿田氏も、選書に困った時に読むべき本と本書を薦めていらっしやう。絵本を深く理解すると、読み聞かせの際の読み方も変わるため、読み聞かせをしている人には必読の1冊である。

(青木)

子ども図書研究室講演会 報告

現在の子どもの本を取り巻く状況や図書館に対する提言を、「図書館でこんな話をし
て申し訳ないのだけれど……」と恐縮しながらも、真剣にお話くださった清水眞砂子氏。「今
の世の中、安心してまじめになれない場が多すぎる」「自分の好きなことを語る人はいても、自
分が何を嫌悪するかははっきり語った大人は（今
まで）いなかった」という学生の言葉にハッと
した、ともおっしゃっています。

◆
若者でなくても「かわいい」という言葉を使
わずに過ごすことが難しくなっている今
の日本。「かわいいおじさん」「かわいい年寄り」
何でも「かわいい」で終わらせてしまう。

「かわいくない（人）」という言葉には、こち
らの言うことをすいすいと聞かない（人）、とい
う意味が込められることを考えると、「かわいい
（人）」とは自分の思い通りになる、NOを言わ
ない、自分の邪魔をしない（人）ということに
なる。それはそのまま現代の「安全、平穏を求
める」「物事を快不快でしか考えない」風潮につ
ながるのではないか。

◆
世の中では残酷な事件が日々起きており、
子どももそのような場面に遭遇すること
がある。同じ学年の中に自ら命を絶つことを選
んだ人がいたとしたら心が揺らいで当たり前だ
し、ひどいことを見聞きすれば平常心でいられ
ないのは当然だ。でも、大人たちは現実だけで
なく、読書の場においても心が揺らがないこと
を目指してしまう。怖い感じがするから、残酷
な場面があるから、という理由で子どもに本を
与えないようにしてしまうのはどうだろう。

◆
子どもが喜ぶからと言ってキャラクター絵
本などを与えるのは「本の高みに自分を
持っていくことをしないで、自分の低みに本を

持っていってしまっている」ことになる。大人
がそれでよしとして与えるから子どももそうい
う好みになってしまう。

この世の中で高みに置くべき本を選ぶことが
大切なのに、公共図書館でもそのことを忘れて
いる。「古い本は捨てて新しい本を入れる」のは
「新しければいい」という考え方に基づいたも
のではないか。私たちは何でも商品としてもの
を見てしまう。だから、きれいなほうがよいと
思ってしまう。でも、きたなくても大切なもの
はある。本に限らず、子どもたちにそういうも
のを与えてほしい。

◆
いろいろな人や本に出会い、自分とは違う
考えがあることに気づく。本の持っている
「絶対譲れないところ」をつかむことで、善
や悪を知っていく。なんでも肯定されるだけで
なんにも否定されないのでは、子どもの世界は
曖昧なものになってしまう。いろいろな考えが
あっていいとわかることは、生きるうえでさま
ざまなものさしを手に入れるということであり、
そのことにより生きやすくなるのだ。

◆
この他、最近の新聞や雑誌に掲載された話
題や、ご自身の体験を織り込んだお話を
いろいろと聞かせてくださいました。清水氏の
歩んで来られた道を垣間見ることができ、自分
自身が子どもと本にどう接してきたかを振り返
る良い機会となりました。

所蔵資料から

研究



『こどもとしょかん』（季刊）

東京こども図書館

1号（昭和54年4月）－

138号（2013年7月）＋

（継続中）

清水氏が講演中に紹介された雑誌の中の一冊。
東京こども図書館は1950～60年代に始め
られた家庭文庫が母体となって生まれた私立図
書館で、『こどもとしょかん』はその機関誌とし
て発行されている。 (杉田)

新着資料から

文学

『左足のポルカ』



手島 織江／作
倉部 今日子／絵
偕成社
2013年4月

1人の少年が崖から落ちた時、“左足”は、「こんなところで死んでしまうのはいやだ。」と考えて、少年の体から逃げ出した。一旗揚げつつもりの左足は、まずは南極で片足を失った冒険家の義足に納まるが、南極探索へ船が出港すると聞き、義足としての職を捨て、単身、密航を企て、ついには南極探検隊の一員となる。

気が付けば、すっかり話に引き込まれているが、主人公は“左足”なのだ。奇妙な趣のある、奇想天外な冒険譚。著者の初めての創作物語とのこと。【小学校高学年から】（鈴木）

知識

『海のうえに暮らす』
地球ものがたり



関野 吉晴／著
ほるぷ出版
2013年3月

バジヨという漂海民の生活を紹介した本。彼らは、GPSやパソコンは持っていない。病気になったら、ウリジンと呼ばれる祈禱師のような人に診察してもらう。だから、我々は、彼らを未開人だと思ってしまう。しかし、彼らの方が平和を愛し、お互いに助け合い、博物学者以上に自然を理解し、環境にやさしい生活をしている。その意味では、我々よりもよほど「先進的」だ。本書を読み、彼らの生活を知ること、本当の豊かさとは何かを考えるきっかけとなるだろう。【小学校低学年から】（青木）

知識

『この羽（はね）
だれの羽（はね）』



おおたぐろ まり／作・絵
偕成社
2013年4月

鳥の羽を見つけると特別なプレゼントをもらったような気持ちになる。いったい「誰からの」「どういうストーリーの」プレゼントなんだろう……と、知りたい気持ちが膨らむ。

「誰からの」プレゼントなのかを調べるポイントが丁寧に説明されていて、贈り主である鳥の様子もわかる。実際にこの本と羽を手にしなから「誰からの」「どういうストーリーの」プレゼントかを推理して観察していけば、今まで気づけなかった鳥の世界が目の前にひろがるにちがいない。【小学校高学年から】（杉田）

絵本

『でんしゃにのったよ』
こどものとも絵本



岡本 雄司／作
福音館書店
2013年4月

主人公の“ぼく”はおかあさんといっしょに、地元の小さな駅から電車に乗って、いとこのしんちゃんの所に出かける。ぜんぶで三つ乗る電車は、乗り換えのたびに大きくなり、ぼくの期待もふくらんでいく。いよいよ新幹線が東京駅に着くと、しんちゃんたち家族がホームで待っていてくれる。地味な色調ではあるが描写は正確で、特定の駅名は出てこないが、静岡に住んでいる者には、なじみの深い景色が出てくる。

子どもも大人も電車に乗って旅に出たくなる絵本である。【3歳から】（小松）